内外産製品ともに少なめ

アカ松はほぼ横ばい提示

吉貞 戸田市場

吉貞（群馬県高崎市、吉田貞裕社長）の戸田市場は14日、荷主協力会展示会市を開催し、31人が参加した。大型連休明けも関東市場の荷動きは落ち着いたまま推移しているが、内外産製品ともに少しずつ品薄感が強まってきた。同市でもWウッド間柱などが入荷遅れで品目が偏り、ロシア産アカ松タルキも品数が減っている。アカ松は4月まで関東市場で値上げが続いたが、ここに来てやや足踏み状態にある。

アカ松の注目度は高いままだ

ここ数カ月値上がりしてきたアカ松だが、今回市では前月に比べて一部品目で多少値上げした程度で提示した。他市場も目立った値上げに動いておらず、横並びで様子を見た。同市ではアカ松を前にして買い方が互いの様子を見守りながら探り探り手当てする雰囲気があり、今回も積極的に前に出ることはなかった。今回市では10万円前後までの品物は売れたものの、役物関係に対する反応は鈍かった。

ただ、例えば同品4㍍×30×40㍉Sグレードは10万3000～5000円（市場渡し、立方㍍）だが、既に11万円で売る玉も入ってきている。次の仕入れを考えれば今回も値上げが必要だった。ただ入荷量が減る割に同市場の手持ち在庫の消化も遅くなり、一定の在庫数量を維持している。「恐らく買い方も仮需で買った在庫が動いていない」（同市場）と見て、今回はほぼ横ばいで提示した。

同品3㍍×30×40㍉KDの現地挽きSグレードで10万5000円の前月比2000円高、同役物を13万円前後で提示。3㍍はかなり少なく、今回も残り3梱包のみだった。役物は次回13万5000円に値上げする。

同4㍍国内挽きは、節ありのPグレード水準が8万円、Sグレードがメーカーにより10万～11万円前後で売れた。無節の品物は同8000円高。国内挽きの役物は13万5000円前後で提示した。現地挽きPグレードは8万5000円の同2000円高で、メーカーによっては9万円。Sグレードは10万2000～5000円前後で、現地挽き国内仕分けの役物は13万円で提示した。

杉間柱3㍍×30×105、120、45×105㍉などはばら売りの残りなども含めて6万円超。Rウッド積層間柱4㍍×30×105㍉は7万円。米ツガの節違3、4㍍×45×90㍉は9万円前後。

タルキの米ツガ国内挽きは4㍍36×45㍉、45×60㍉で10万5000円、同アカ松4㍍×45㍉角、45×60㍉は9万円前後。アカ松は次回から値上げする。

ヌキ胴縁は桧KDモルダー4㍍×15×45㍉が9万円、杉役物無節上小4㍍×15×45㍉が6万円、秋田杉3・65㍍×18×90、18×45㍉が7万円。アカ松桟木現地挽き4㍍×24×48㍉は7万5000円、同国内挽きは7万5000円、同特等は10万円前後。

地域ビルダー戦略 ＞575＜

岩手県産カラ松使った木造にこだわり

顧客ケア・独自体制充実で地元に密着

藤島建設（埼玉）

藤島建設（埼玉県川口市、佐藤智之社長）は、本社のある川口市とさいたま市の埼玉南部を主な商圏に木造住宅を供給する。創業65年で累計1万5000棟の実績を持ち、近年は同エリアでコインランドリーなど非住宅物件の事例も増えている。木造にこだわり、同社ならではの事業体制や顧客サービスで、地域と信頼関係を築いている。

主力とする注文住宅事業で、1万5000棟の実績を積み上げてきた。用いる資材は、「オール国産材」にこだわり、構造用としては高品質の岩手県産カラ松集成材を使っている。岩手県の木材業者と連携して仕入れ、埼玉スタジアムに隣接する自社プレカット工場で加工する。工法は金物工法。これら家づくりを軸に、施主の理想とする家に近づけていく。

住宅の仕様によっては、独自の木質断熱材「フジシマウッドファイバー」を採用し、高断熱と環境配慮を両立する。地熱利用システムも要望に応じて取り入れる。

住宅の構造や仕様だけでなく、事業体制でも「他社ができないことを実践する」（佐藤社長）。施工体制では、職人等の協力企業を束ねた「藤和会」を組織。この組織のメンバーは同社施工現場において、職務内容や氏名等を記した会員証を現場の作業板に添付、「職人の顔の見える家づくり」を進める。職人個々の責任意識向上や、現場周辺住民との円滑なコミュニケーションにも役立っている。

また、建て替え等で自宅を一時的に離れる施主は「仮住まいサービス」で支援する。モデルハウスだった物件を、新居入居までの仮住まいとして提供する仕組みで、家賃は5万円から。光熱費等は同社が負担し、施主の経済的負担も緩和する。地域密着の事業展開だからこそ可能なサービスだ。

打ち合わせの段階では、パースを用いた間取り作成だけでなく、実物大間取り体験も手掛ける。プレカット工場内に併設した「F－studio（エフ・スタジオ）」が体験施設。予定する間取りを吊り下げ式ボード等を使って再現するもので、35坪ほどの間取りまで再現可能。1時間余りで設置できるので、例えば1日の打ち合わせで午前に1階、午後に2階の間取りを設置するといったこともできる。佐藤社長は「自社プレカット工場があるからこそ可能な取り組み」と話す。

独自性を高めた家づくりを続けるなか、非住宅事業も拡大基調にある。協力関係にある約200社の地域不動産事業者等からの依頼が多く、アパートやコインランドリーなど物件は多彩。非住宅物件の資材加工も自社で手掛ける。

一般住宅と非住宅の両面で木造にこだわり、木を使った地域づくりに貢献している。

ショールームに展示する同社の構造モデル。岩手県産材をアピールする

モンキーポッドの一枚板などに関心

国土緑化運動の講演も

東京木材市場・さつき祭り

東京木材市場（東京都、市川英治社長）は9日、さつき祭りを開催し、買い方30人が集まった。

モンキーポッドの一枚板をじっくり確認する見学者

杉3・65㍍×90×13㍉が5万1000円（立方㍍）、杉4㍍×90㍉が3万5000円（同）、ロシア産アカ松4㍍×30×40㍉Sグレード11万円(同)などがせり落とされた。

3、4月の記念市に比べるとせり落とされた製品も多かったようだが、買い方や問屋によると、「まだまだ需要が回復したとはいえない」との声も聞かれた。

モンキーポッドやタモ、屋久杉の一枚板も出品された。美しい木目に参加者の注目を集めた。また、市場の見学者もじっくりと見入っていた。

せりの前に国土緑化機構による第33回森と花の祭典「緑の感謝祭」協賛事業として、初の試み「国土緑化運動の歩み」についての講演が行われた。講演会には、東京都内の学校関係者などの顔ぶれもあった。

24・25日、開設記念木魂祭・銘青会まつり特市

秋田県銘木センター

秋田県銘木センター（秋田県能代市、瀬川貴志理事長）は24、25の2日間、開設記念木魂祭・銘青会まつり特市を開く。杉を中心に能代市近郊の銘木製材業者が製材する銘木製品約3000点を出品。

秋田県銘木センターは銘木専門の市場で、1、5、9月の年3回、大型の展示会を開く。杉の大径材は全国的に供給が少なく、銘木製品の供給も不足気味のなか、まとまった量が出品される同センターへの集客は最近、増加傾向にある。今回も天井板や帯戸板、厚板、床柱、落とし掛け、鴨居、框平割など能代の製材業者が全国を回って積極的に集荷した杉の大径材から製材した各種銘木製品を多数出品する。開市は両日とも午前9時から。

問い合わせは同銘木センター（電話0185・54・1541）まで。

植樹祭の演台とシンボル台寄贈

農林中金岡山が岡山県に

農林中央金庫岡山支店（松本和寿支店長）は、岡山県森林組合連合会（小野泰弘代表理事会長）の製作協力の下、岡山市で25日に開かれる「第74回全国植樹祭」で使用する県産桧で作成した演台とシンボル台各2基を寄贈した。15日に岡山県庁で感謝状の贈呈式があり、松本支店長が植樹祭岡山県実行委員会会長の伊原木隆太県知事から県産桧製の感謝状を受け取った。

演台は高さ110×幅90×奥行き60㌢で、式典当日に会場で主催者のあいさつなどに使われる。シンボル台は高さ65×幅・奥行き61㌢で、植樹祭のシンボルでもある木製地球儀のリレーセレモニーに活用する。いずれもヤマシタ（岡山市、山下英一社長）が加工・製作した。

伊原木知事（左）から感謝状を受け取る松本支店長（右）と小野代表理事会長

松本支店長は「国産材の名産地の岡山県で植樹祭が開かれるのは喜ばしく、応援している。全国に県産材のすばらしさを伝えることができたら」と述べ、植樹祭の成功を祈念した。伊原木知事は「全国植樹祭で多大な協賛をいただき心強い。後年語り継がれる植樹祭にしたい」と話した。

同支店は、2015年度から県産材を利用したベンチや組立ボックスを県内の各施設に寄贈。同金庫は、これまで植樹祭で使用する司会台（演台）やシンボル台、ベンチ等を贈っている。